

と く
徳

ほ う
朋

やわ
柔らかな心をいただく

はじめ
伊藤 元



いとう はじめ
1935—現在
福岡県生まれ。真宗大
谷派徳蓮寺前住職

親鸞聖人の書かれた『^{きやうぎやうしんしやう}教行信証』という書物に「^{こんごうしん}金剛心」の^{ぎやうにん}行人」という言葉があります。
「^{こんごうしん}金剛心」の^{ぎやうにん}行人」とは仏さまの教えを^よ拠り^{どころ}所にして生きている人の事を言います。「^{ぎやうにん}行人」というのは仏道を歩む人です。「^{こんごう}金剛」というのはダイヤモンドのように何よりも硬いということです。つまり、自分の考えを捨てられないが、自分の考えよりも仏さまの教えの方が^{うなづ}領けるということです。その^{うなづ}領ける心がダイヤモンドのように硬いのです。そういう人の事を「^{こんごうしん}金剛心」の^{ぎやうにん}行人」と親鸞聖人はおっしゃいます。

^{こんごうしん}金剛心」の^{ぎやうにん}行人は、仏さまの教えに^{うなづ}領ける金剛のように硬い心をお願いののですが、親鸞聖人は同時に「^{にやうなんしん}柔軟心」という心をお願いの物だとも言われています。柔も軟もどちらも「やわらかい」という意味ですが、仏さまの教えを本当に^{うなづ}領く心が^{こんごう}金剛のように硬い人は、同時に^{やわ}柔らかい心が与えられるということです。

これは矛盾するようではありますが、仏さまの教えが本当に^{うなづ}領けるという事は、自分の考えに対する確信が^{うす}薄らいでいくということなのです。自分の考えだけ信じて、自分の考えを^{つらぬ}貫く人は頭が固くなるばかりです。自分の考えを捨てるわけにはいきませんが、自分の考えよりも仏さまの教えの方が「本当にそうだな」と、そう^{うなづ}領く心が強ければ強いけど、自分の考え

は間違いないと思っている確信、そういう自分の思い込みが薄らいでいきます。自分の考えに対する確信が薄らいた分だけ、自分の心が広がっていくのです。

自分の経験や考えを固く信じている人は、自分の考えと違う人とはなかなかわかり合えません。どうも私にもそういう傾向がありますが、そのような傾向にある根っこには、やはり能力によって人を見ていることがあるでしょう。能力や才覚は、生きていく上で大きなはたらきをします。しかし、それは人間の本来的な価値とは違うのです。ここが分かるといいですね。芸術的な才能のある人、音楽的才能のある人はすごいではないですか。芸術もダメ、音楽も出来ない、何も出来ない。私はそうですが、何もできないからといって、才能のあるなしで他人と比較することは出来ません。そもそも仏様から願いをかけられているという点では、みんな平等なのです。



(『ご法事を縁として』)

「自分の考えに対する確信が薄らいでいく」とは、自分の価値基準が間違っている事に気付かされていく事でもあります。自分の考えは捨てられませんが、常に教えられていく事が大切な事だと思います。(哲弘 拝)



この「徳用」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。